

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第10回

福岡表警聞懐旧談 (五)

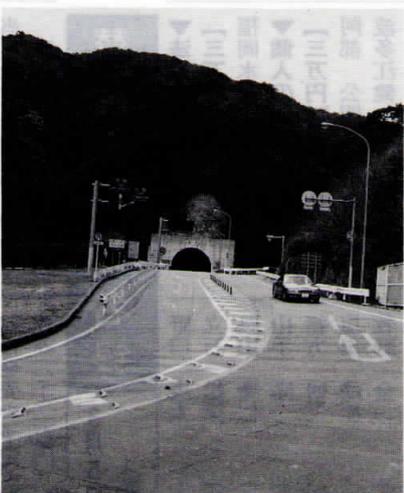
明治七年の佐賀の乱に際し、反政府派福岡土族の指導者越知彦四郎らは大久保利通、児玉源太郎の誘いに乗り、政府軍の募兵に応じた。こうして結成されたのが福岡貫属隊であった。一方の指導者武部小四郎は終始、これに反対し、ついに参加しなかった。自ら死に場を求めてあせる越知と、慎重な武部という対照は、そのまま「福岡の変」の際の対立を予感させるものであった。

越知彦四郎らの本心は政府軍として行動し、江藤新平ら佐賀土族に合流するつもりで、密約もあったと言われている。ところが、福岡土族の内、穂波半太郎は大久保、児玉に内通し、反乱を予期した児玉は、福岡土族に銃器を支給した際、銃と弾薬との口径が合わないように配慮したのであった。これが文中「チグ」と書かれている部分で、ちぐはちぐという意味だろう。

このため、三瀬峠の戦闘で、福岡土族は佐賀土族の夜襲を受け、なすすべもな

く犠牲を出すことになった。安川敬一郎の次兄幾島徳も戦死した一人。炭鉱経営に従事していた幾島の死が、勉学を志していた安川を炭鉱へと呼び寄せることになったのである。また、九年の秋月の乱の際、警部として偵察に出た穂波半太郎は血祭りに上げられることになる。佐賀の乱での裏切りが責められたもの。こうして穂波は福岡県で最初に殉職した警察官となった。

さて、三瀬峠の戦闘は、後に尾を引き、明治十年の「福岡の変」の際、福岡土族の佐賀通過を佐賀土族が拒否するという事態となつてはねかえつた。今回は、明治九年十二月に、萩の乱に呼応しようとした箱田六輔、頭山満、奈良原至、宮川太一郎、進藤喜平太らが逮捕される前後の時期までの事情が描かれる。彼らが逮捕されたことが、皮肉にも、福岡土族の一部勢力を温存することにつながり、後の玄洋社の結成を準備することにるのである。



かつての戦場には、今トンネルが通っている。トンネルの手前から右手に行けば旧道だ。

依て宮川は少しく忌諱せし所あり。それより猶も浜辺を□みて、曾て知辺の須崎裏町の船手真鍋佐蔵が居室を叩きて、暫時その身を寄せ、同家の母によりて世上の模様を聞纏はせしに、程無く帰り来りてその咄によりて、越知(西職人町に居住せり)、武部は既にその身を脱して何方へ歟潜伏せしことを知り、稍その心を安んじ、宮川は夜に入りて堀端切通しなる月成家を訪ひ、主人の元雄に面接してその注意を促し、夫れ

独(ひとり)それのみならず、即ち九年の冬、前原が拳兵せしや、件の兵器弾薬庫は頓に閉鎖せらるゝのみか、弾薬は渾て池に投じて其用を為さず。抛(な)なく山陰道に出て脆(脆)くも敗死を取りしことを知らる可し。

夫れより佐賀の乱収まり、九年十月に及んでは神風連の暴発、踵で近く秋月表の騷擾とはなりしと雖も、我が福岡の三団社は毫も動かず、自若として経営なせし。豈(いか)武部、越知が注意の自重深遠に非ずして何ぞや。

斯くて西南の妖気発萌せられんとするや、それと同時に福岡表、土族の挙動如何は最も警吏が注意せしが如かりしが、果して然り、之然り、箱田六輔、奈良原(一至)が挙動が端なく発露して、突然警吏に捕縛繋囚せられたりとの風説行はる。是即ち明治九年十二月十五、六日の事なりけり。されば、宮川太一郎、阿

より裏手の田圃を経て宮の谷の一軒家なる頭山満が居室に其身を寄せたり。頭山は慇懃に款待して当分の余り草廬に潜み、以て世上の動静を窺ひ其身を処す可しとの好意を与へしかば、宮川もその意に任かれ、大約十日間計りも其家に滞在せしが、其間には某々の同志も日夜来話せしかば、共に膝を交へて襟を披きて時事に係り、秘密の話を交換せしこと、知らる。主人頭山は西南の妖気を察せられしにも拘らず、同志箱田、奈良原を首として捕縛繋囚せられしにも拘らず、毫もこの意と措(は)らず、裕如寛如、朝夕一部の経史を繕きつ、時としては来訪同志者の為め、天地を祭りて桃園に義を結ぶてふ、玄徳雪夜に隆中の臥竜を訪ふとかの三国史(志)の活演説をも試み、高談雄弁草廬を震動し、座客をして士気を養ひ安慰を保たしめしこともありしなり。されば宮川は充分に其気を養ひ所思せし子細あり。意を決して頭山家を辞して船町の自宅へ帰りしに、武部は未だ何方に歟潜伏して家に帰り居らず、又自宅の留主に屢々(しばしば)巡査が尋ね来りし由をも聞かから、荷物と家具を一車に積みなして自から警察署に詣りて名乗り出づ。

明治丁丑
福岡表警聞懐旧談 上
清瀬野生編述
第二回(続き)

数隊に於ては佐賀兵は密約に反し現に実弾を装したりとて反省して、水無、三瀬口の激戦に及びたり。跡にて聞く所に依れば、佐賀の先鋒兵をして彼の飯場を夜襲せしめしは、某〇〇〇の煽動に出しものなりとの風聞す。何れにせよ、当時政府が事を処するに緻密にして、その予図の深遠なりしは、今日に於て威仰せしめたりき。

○武部小四郎、越知彦四郎、山中立木、大庭弘等、相謀りて矯志、強忍、堅忍(堅志の誤り)の三団社を合併して十学舎を創む。

○曾て鹿兒島に遊方(ママ)せし矯志社員内海重男急行、同表の挙動穩かならざる警報を齎し帰る。

○福岡同志、評議之結果、十一学舎員松本俊之助、西南の事情探偵として熊本表に赴き帰報す。

第三回

○西南妖気発萌之余響箱田六輔、宮川太一郎等一累首として捕縛繋囚せらる。